

# 共同研究の経緯と概要

上野和男

## 1 全体計画の概要とその成果

### (1) 国立歴史民俗博物館の「都市研究」

これまで国立歴史民俗博物館では発足以来、全体課題「都市における生活空間の史的研究」のもとに、三期一二年間にわたって都市史研究にとりこんできた。一二年間に一一課題の共同研究を実施し、さらに一九三〇一九九四年度には総括的研究を実施した。一一課題の共同研究は、原始古代から現代の民俗まで各時代にわたる日本の都市史を、歴史学と考古学、民俗学の三学協業によって明らかにするのが目的であった。

これまでの共同研究の研究体制をふりかえれば、第一期は古代、中世、近世、近現代と民俗の四つの時代別に研究班を組織し、それぞれの時代の都市史の個別研究にあたった。しかしながら、時代別に研究課題を設定した結果、各研究班相互の連携が必ずしも充分でなかったとの反省から、第二期は時代別を越えた四つの研究課題（都市形成、都市自然環境、呪祭と歓楽、都市絵画・都市図）を設定し、三学協業をより強化する体制で共同研究を組織した。しかしながら、第二期もまたそれぞれの共同研究の実施時期に差があったなどの条件から、各班の連携はさらに後退した。第三期は都市の交流空間を共通課題として、「権力表象」「道と川」「広場」の三つの共同研究を組織したが、各班の連携ははかられず、

歴博の都市史研究の目標自体も不明確となった。

これまでの都市の共同研究の研究内容についての問題点は以下の三点に要約できる。①都市の空間構造に重点があり、都市住民の生活史研究が充分ではなかった。②政治都市に研究対象が傾斜し、都市の経済的機能その他の研究が不十分であった。③事例的研究が多く、都市の概念の問題や都市研究の一般理論化が充分ではなかった。

### (2) 研究計画の概要

こうした反省をふまえて、あらたに開始した基幹研究「日本における都市生活史の研究」は、都市住民の生活史に焦点をあてて、都市のもつ流通・消費などの経済と文化に注目し都市性を明らかにすることを目的とする。研究期間は六年間のうち、最初の三年間（一九九六―一九九八）は「共同研究」として、都市生活史についての全般的な討議を行う。後半の三年間（一九九九―二〇〇一）は「特定研究」として、特定の都市をフィールドとする研究を試みる。研究班は六年間にわたって、ほぼ一六〇〇年を境に二班構成とする。一六〇〇年以前の都市史を課題とするA班は「古代・中世の都市をめぐる流通と消費」を研究課題として、政治や生産ではなく流通・消費などの経済的側面から都市生活史にアプローチする。具体的には、①財貨とサービスの流通・消費の様相の解明、

「物価表」の作成、②流通・消費の場の解明、都市構造、住民構成との関係、などを明らかにする。一六〇〇年以降の都市史を課題とするB班は「都市の地域特性の形成と展開過程」を研究課題として、都市の地域特性が近世以降のように形成されてきたかを、流通・消費などの経済的側面と文化的側面（都市民俗、宗教儀礼など）からアプローチする。

この基幹研究では、A・B両班が密接に連携して研究の推進をはかるため、随時、合同研究会を開催する。また、この基幹研究の成果は、『国立歴史民俗博物館研究報告』や各種シンポジウムなどを通して発表する。

### （3）準備研究

基幹研究「日本における都市生活史の研究」の研究計画の立案にあたったのは、当時、国立歴史民俗博物館が試行実施した研究系のうち、都市・村落・家族などの基礎的組織を研究するために組織された「第二研究系」であった。準備研究会（『基幹研究「日本における都市生活史の研究」の準備研究会』）は、一九九六年三月二十八日（木）に国立歴史民俗博物館で行われた。開催の目的は以下のとおりであった。

「第二研究系では、一九九六年度より基幹研究「日本における都市生活史の研究」を発足させることを予定している。発足以来、国立歴史民俗博物館の都市の共同研究は、都市の生活空間に焦点をあてて研究をすすめてきたが、この基幹研究は流通・消費・文化の場として都市をとらえ、これまでの研究では十分に明らかにし得なかった都市住民の生活史を解明しようとする新たな研究プロジェクトである。この基幹研究は六年計画で、三年間は共同研究として都市生活史に関するデスクワークを行ない、後半の三年間は特定研究としてフィールドワークを中心に研究をすすめる計画である。第二研究系ではこの基幹研究をできるだけ早く発足させるとともに、研究計画についてより具体的な検討を行なう目的で準備研究会を開催した」（『準備研究会開催報告書』）。

報告と討議は以下のように行われた。

#### ①報告

桜井英治 「中世物価研究の資料について」

小島道裕 「都市と消費」

小林忠雄 「都市と都市性」

②基幹研究「日本における都市生活史の研究」の研究計画、とくに一九九六年度の研究計画についての討議。

準備研究会の成果は以下の二点に要約できる。第一は、日本の都市生活史研究の現状と問題点についての報告と討議である。三件の報告にもとづいて、A班「古代中世の都市をめぐる流通と消費」（研究代表者・桜井英治）の物価研究および消費の場の研究の方針について検討するとともに、B班（都市の地域特性の形成と展開過程―近世以降の流通と文化を中心に―）（研究代表者・吉田伸之）に関連する都市研究の最近の動向と問題点について検討した。第二に、基幹研究「日本における都市生活史の研究」の第一期の具体的な研究計画の検討。A・Bそれぞれの班の当面の研究計画、研究会の予定、および、「物価表の作成計画、B班の名古屋を中心とする資料調査計画について討議し、B班については、日本の都市の地域特性の研究会とともに、資料調査を並行してすすめることになった。

準備研究会参加者は以下のとおりである（所属は開催時）。

上野和男 国立歴史民俗博物館民俗研究部（開催責任者）

吉田伸之 東京大学大学院人文社会学系研究科

桜井英治 客員教官（北海道大学文学部）

岡田茂弘 国立歴史民俗博物館情報資料研究部

吉岡康暢 国立歴史民俗博物館考古研究部

山本光正 国立歴史民俗博物館歴史研究部

小林忠雄 国立歴史民俗博物館民俗研究部

小野正敏 国立歴史民俗博物館考古研究部  
 小島道裕 国立歴史民俗博物館歴史研究部  
 千田嘉博 国立歴史民俗博物館考古研究部

(4) 基幹研究の全体研究会

第一回研究会 一九九六年六月十六日、十七日

(於国立歴史民俗博物館大会議室)

・上野和男「日本における都市生活史の研究序論―研究計画の概要と課題―」

・桜井英治「中世都市をめぐる流通と消費」

・吉田伸之「都市生活史研究の現状と課題(近世)」

第一回の全体研究会は、はじめに研究班全体として、基幹研究「日本における都市生活史の研究」(研究代表者・上野和男)の研究目的と三年間の研究計画を確認するために開催した。上野和男の報告では、国立歴史民俗博物館のこれまでの都市研究を総括し、その意義と問題点を明らかにした上で、本基幹研究の研究目的・計画についての報告があり、都市住民の生活の実態により具体的にアプローチするプロジェクトとして、本基幹研究を推進することを確認した。

第二回研究会 一九九八年三月十二日、十三日

(於国立歴史民俗博物館大会議室)

・桜井英治「A班…二年間の活動と今後の課題」

・吉田伸之「B班…一九九六―一九九七年度の小括と九八年度の展望」

・総括討論

第二回の合同研究会は、本基幹研究開始から二年を経過した一九九八年三月に実施した。この合同研究会では、まず、それぞれの研究代表者が二年間の各班の研究状況、論点等について報告したのち、流通・消費・文化を中心とする都市生活史研究の全般的な問題点について詳細な

討議を行った。A班からは、都市的流通の特性とは何か、流通消費の場としての都市の特徴は何かなどの問題が提起されるとともに、考古学と歴史学の学際的協業の諸問題についても問題点の指摘があった。B班からは、流通消費・文化から都市の地域特性を明らかにする上で、都市内社会構造(とくに都市部分社会の構造、集団構造、権力との関係)、都市外社会関係(とくに都市と周辺農村との関係、都市間関係)の重要性が指摘された。これらの問題提起から、第一期の都市生活史研究の焦点と今後の課題がより明確になったといえる。つまり、都市生活史研究の課題は、流通・消費・文化から一般的な「都市性」をどう抽出するか、またその都市性が地域や都市形成形態によっていかに異なり、「都市地域特性」を形成しているかという二つの課題である。

(5) 研究成果

本基幹研究「日本における都市生活史の研究」第一期(一九九六―一九九八年度)は、歴史学、考古学、民俗学などの分野における流通・消費・文化にかかわる最近の都市研究を検討し、第二期に予定したフィールドワークなどの共同作業の基礎を確認することが目的であった。A班においては、歴史学における文献による流通・消費の研究、とくに商品やサービスの価格についての研究と、陶磁器を中心とした考古学の流通・消費の研究とのすり合せを行い、多様性と大量性が都市的流通消費の特質であることを確認し、具体的な流通商品の照合をも試みた。さらに富士吉田などで見学調査を実施し、流通消費の場としての市・宿を確認した。B班は、都市地域特性に関するこれまでの各分野の研究を検討し、商品、河岸、舟運、都市構造、芸能興行、祭礼、民間信仰、言語など流通・消費を中心に都市地域特性を明らかにする際に問題となる都市的要素を抽出した。また、第二期研究に備えて、佐倉、成田、佐原、銚子、関宿など利根川流域から江戸(東京)にかけての諸都市の予備的調

査を実施し、それぞれの都市の特性について予備的検討を行なうとともに文書などの史料を確認した。A班・B班とも第二期研究に向けた基礎的作業をほぼ予定どおり終了し、第二期における物価表を中心とする都市生活史データベースの作成と、利根川流域から江戸（東京）にかけての諸都市の都市地域特性のフィールドワークの基礎が整った。

しかしながら、第一期研究はつぎの二点について問題があった。ひとつはA・B両班の連携の問題である。本研究においては、これまで二度（第一年度の発足時点と第二年度の中間点）で合同研究会を開催し、全体の研究目標と中間点での各班の議論について確認したが、流通・消費から都市性を明らかにしようとするA班と、都市地域特性を明らかにしようとするB班とは、対象とする時代の違いもあって議論は必ずしも噛み合わなかった。A・B両班のいっそうの連携は第二期の課題である。いまひとつは、B班の研究対象の選択の問題である。B班は三都以外の都市の地域特性を明らかにするため、対象として名古屋を中心とする地域を選定し、フィールドワークにそなえての予備的研究も実施する予定であったが、名古屋地域の研究状況は、本館の共同研究としてフィールドワークを実施するには困難な状況であることが明らかになった。そこで、対象を関東地方の利根川流域から江戸（東京）にかけての都市に変更した。

## 2 B班「都市の地域特性の形成と展開過程

—近世以降の流通と文化を中心に—

### (1) 研究目的

本研究は、都市住民の生活史についての歴史学、考古学、民俗学を中心とする学際的研究である。国立歴史民俗博物館のこれまでの都市研究は都市の生活空間に焦点を当ててきたが、本研究は都市住民の生活史に焦点をあてて、流通・消費などの経済と祭祀儀礼・都市民俗などの文化

に注目し、都市の都市性を明らかにすることを目的とする。研究期間は六年間のうち、最初の三年間（一九九六—一九九八）は「共同研究」として、都市生活史についての全般的な討議を行う。後半の三年間（一九九九—二〇〇一）は、特定の都市をフィールドとする研究を試みる。研究班は六年間にわたって、ほぼ一六〇〇年を境に二班構成とする。

一六〇〇年以降の都市史を課題とするB班は「都市の地域特性の形成と展開過程」を研究課題として、都市の地域特性が近世以降どのように形成されてきたかを、流通・消費などの経済的側面と都市民俗・祭祀儀礼などの文化的側面からアプローチする。

日本の都市は、一方では都市としての普遍的性格を持ちつつも、他方では個別的なさまざまな特性を持って存在し機能している。個々の都市の特性は成立時期や形成時の機能や性格などによって規定されるが、この研究で主として注目するのは、都市が位置する地域との脈絡のなかで形成される地域特性である。これまでの都市史研究のなかで、日本各地の都市についてのモノグラフ的研究が数多く蓄積されてきたが、これらと比較し都市の地域特性や類型を明らかにしようとする研究は、たち遅れているのが現状である。こうした都市研究の現状をふまえて、この研究ではおもに近世以降に形成された沖繩を含む日本各地の都市を対象に、都市の地域特性がどのように形成され、またその典型的特性が現代にいたる都市計画や町おこし運動など近代以降の都市の展開をどう規定し、また変容したかを都市生活史の視点から歴史的に明らかにする。その際、都市間比較、都市と周辺地域との関係、都市の住民意識などを手がかりとしてこの課題に接近する。都市間比較による日本の都市の地域特性の解明は、日本の都市を広くアジアの都市やヨーロッパの都市などと比較し、世界的視野においてその特質を明らかにする比較都市史研究の前提となる研究でもある。

(2) 研究組織 (◎は研究代表者)

〈共同研究員〉

◎吉田伸之 東京大学大学院人文社会系研究科・教授・近世史

総括、近世流通構造

岩田浩太郎 山形大学人文学部・助教授・近世史

近世流通構造

宇佐美英機 滋賀大学経済学部・助教授・近世史

近世流通構造

斎藤善之 東北学院大学経済学部・講師・近世史

近世流通構造

森下 徹 山口大学教育学部・助教授・近世史

近世都市構造

岩淵令治 国立歴史民俗博物館歴史研究部・助手・近世史

近世都市構造

千田嘉博 国立歴史民俗博物館考古研究部・助手・考古学

近世都市構造

小林文雄 山形県立米沢女子短期大学・助教授・近世史

近世都市文化

横田冬彦 京都橘女子大学文学部・教授・近世史

近世都市文化

久留島浩 国立歴史民俗博物館歴史研究部・助教授・近世史

近世都市文化

山本光正 国立歴史民俗博物館歴史研究部・助教授・近世史

近世都市文化

湯浅 隆 国立歴史民俗博物館歴史研究部・助教授・近世史

近世都市文化

波平勇夫 沖縄国際大学文学部・教授・社会学

都市社会構造

上野和男 国立歴史民俗博物館民俗研究部・教授・民俗学

都市社会構造

内田忠賢 お茶の水女子大学文教育学部・助教授・地理学

都市民俗

倉石忠彦 国学院大学文学部・教授・民俗学

都市民俗

小林忠雄 東京家政学院大学人文学部・教授・民俗学 都市民俗  
島村恭則 国立歴史民俗博物館民俗研究部・助手・民俗学

中井精一 富山大学人文学部・助教授・方言学 現代方言

阿南 透 江戸川大学社会学部・助教授・民俗学 都市祭礼

〈招待報告者〉

山本太郎 倉敷市教育委員会

神田由築

大木 衛

島田 洋 千葉県立関宿城博物館・学芸員・近世史

酒井右二 千葉県立佐原高校・教諭・近世史

又野 誠

(3) 研究会の記録

第一回研究会 一九九六年六月十六日、十七日

(於国立歴史民俗博物館大会議室)

◎AB両班の合同研究会

・上野和男 「日本における都市生活史の研究序論―研究計画の

概要と課題―

・桜井英治 「中世都市をめぐる流通と消費」

・吉田伸之 「都市生活史研究の現状と課題 (近世)」

・斎藤善之 「『師崎屋旧記』をめぐる流通の問題について」

◎B班研究会

第二回研究会 一九九六年九月十四日、十五日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室)

・中井精一 「都市言語学からみた近代大阪語」

- ・山本光正 「行楽地よりみた江戸東京とその近郊」
- ・小林忠雄 「都市の地域特性について―民俗学的視点から―」
- ・小林文雄 「城下町仙台の興業地について」
- ・湯浅 隆 「江戸における大名家の墓所―出羽国松山藩酒井家墓地の事例―」

第三回研究会 一九九六年十二月七日、八日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室)

- ・宇佐美英機 『『出世証文』考―上方の事例から―』
- ・千田嘉博 「近世城下町の成立」
- ・横田冬彦 「大阪近郊在郷町の文化構造」
- ・阿南 透 「現代日本の都市祭礼」

第四回研究会 一九九七年三月十四日、十五日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室)

- ・国立歴史民俗博物館所蔵近世都市絵図の調査
- ・上野和男 「江戸近郊都市の社会構造―川越の祭礼と家族組織―」
- ・山本太郎 「倉敷代官所の行政機構―倉敷村を中心に―」
- ・佐倉調査 武家屋敷、旧城下町、佐倉新町おはやし館など。

第五回研究会 一九九七年六月七日、八日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室)

- ・波平勇夫 「近代期沖繩の都市化と農村工業」
- ・内田忠賢 「江戸人の不思議の場所―世間話・怪異小説を史料に―」
- ・久留島浩 「都市の祭礼研究ノート―東照宮祭礼を中心に―」

- ・吉田伸之 「一九九七、九八年度の研究計画について」

第六回研究会 一九九七年九月六日、七日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室、および成田市)

- ・森下 徹 「近世山口町の『発展』について」
- ・岩田浩太郎 「天明期の米穀市場について」
- ・倉石忠彦 「都市における民俗社会の形成」
- ・神田由築 「下総国成田における芸能興行」
- ・成田調査 成田山新勝寺、成田山霊光館、成田門前町並、商家など。

第七回研究会 一九九七年十二月六日、七日

(於銚子市立公正図書館)

- ・大木 衛 「銚子の文化的発展のあと」
- ・銚子調査 銚子市立公正図書館(田中玄蕃家文書ほか)、市内河岸跡地、遭難者慰霊碑、外川町並(紀州漁民移住地)、ヒゲタ醤油、高田河岸跡地など)

第八回研究会 一九九八年三月十二日、十三日

(於国立歴史民俗博物館大会議室)

○AB両班の合同研究会

- ・桜井英治 「A班…二年間の活動と今後の課題」
- ・吉田伸之 「B班…一九九六―一九七年度の小括と九八年度の展望」

○本班研究会

- ・総括討論
- ・齋藤善之 「港町銚子の構造と流通機能の変遷―田中玄蕃日記」

(銚子市立図書館筆者本)に見る―

- ・岩淵令治 「塀の向こうの神仏―藩邸の神仏と江戸の人々―」

第九回研究会 一九九八年六月二十日、二十一日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室および千葉県立関宿城博物館)

- ・小林忠雄 「民俗研究映像『風の盆ふいりんぐ』」
- ・岩淵令治 「関東豪農商と江戸―関宿豪商喜多村家『家訓永続記』をよむ―」

- ・島田 洋 「関宿史蹟調査にあたって」

- ・関宿調査 境河岸、関宿城址、千葉県立関宿城博物館、関宿小学校(旧藩校教諭館)、旧家臣団居住地、実相寺、宗英寺など。

第一〇回研究会 一九九八年八月二十九日、三十日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室および佐原市)

- ・上野和男 「佐原の都市祭礼と都市社会構造―予備的報告―」
- ・酒井右二 「在郷町佐原の形成」
- ・吉田伸之 「佐原屋庄兵衛と小網町付船仲間」
- ・佐原調査 伊能忠敬記念館↓中心市街地

第一一回研究会 一九九八年十一月二十八日、二十九日

(於国立歴史民俗博物館第二会議室)

- ・国立歴史民俗博物館企画展示『収集家一〇〇年の軌跡』見学
- ・久留島浩 「水木コレクションから何をよむか」
- ・森下 徹 「水木コレクションをみての感想」
- ・中井精一 「展示批評・企画展示『収集家一〇〇年の軌跡』」
- ・又野 誠 「企画展示『収集家一〇〇年の軌跡』を見て」

- ・島村恭則 「境界都市の民俗学―下関の在日コリアン社会をめぐって―」

- ・岩田浩太郎 「河川流通と沿岸諸村―中利根川流域の『新河岸』争論―」

- ・小林文雄 「関東取締役道案内人史料について」

第一二回研究会 一九九九年三月六日、七日

(於国立歴史民俗博物館大会議室)

- 公開シンポジウム「都市の地域特性―下総における都市と地域特性―」
- ・小林忠雄 「マチ場の感覚表現と民俗―板橋を中心に―」
- ・上野和男 「関東の都市の地域特性―川越と佐原を中心に―」
- ・横田冬彦 「地方城下町と上方の文化的関係―書籍の流通を素材に―」
- ・中井精一 「言語地理学からみた利根川下流域―上方系語形の残存に焦点をあてて―」
- ・斎藤善之 「近世の東北―関東流通構造と銚子港町―」
- ・吉田伸之 「近世利根川舟運と流域都市」

#### (4) 研究成果

B班の研究は、国立歴史民俗博物館などにおける共同研究会において、日本の各地域の都市の地域特性について報告・討議するとともに、千葉県内の主として利根川から江戸にかけての諸都市の概括的なフィールドワークを実施するのが中心であった。

第一年度の一九九六年度は、四回の研究会を開催した。はじめに研究目的や研究計画を確認したのち、研究代表者から、最近の歴史学における都市生活史研究の現状と課題について報告があったのち、各共同研究員から、これまでの研究にもとづいて全国の諸都市の地域特性について

の個別的報告があった。また、第一回のフィールドワークとして、佐倉城下町の概括調査を行った。

一九九七年度は四回の研究会を実施した。そのうち三回の研究会は国立歴史民俗博物館での研究発表と討議ののち、千葉県内の成田、銚子の都市地域特性についてのフィールドワークを実施した。成田は寺内町、銚子は港町であり、それぞれ都市形成形態がことなるこれらの都市の地域特性の差異を明らかにすることが調査の焦点であった。B班は当初、名古屋を中心に都市地域特性を研究する計画を立てていたが、第二期に向けて調査地を設定するにあたって、関東の都市の流通消費に重要な役割を果たしていた利根川流域から江戸にかけての都市を対象とすることに方針を変更した。したがって、この時期のフィールドワークは第二期研究への予備調査の意味もあった。A班の今年度の議論は、沖縄、山口などの全国の諸都市の地域特性の問題とともに、千葉県内の都市の地域特性の問題にもかなり集中した。

三年目にあたる一九九八年度の研究目標は、日本の都市の地域特性を総括するとともに、調査地域の選定や研究計画の具体化など第二期研究の準備にあたることであった。一九九八年度も日本各地の都市の地域特性について、関東地方の都市を中心とした研究報告をふまえて討議するとともに、三月開催のシンポジウムにおいて、都市地域特性の概念、実態とその要因についての総括的検討を行なった。また、利根川流域の都市の予備的な調査を関宿と佐原において行なった。関宿については関宿の豪農商に関する報告と関宿の歴史についての概括的報告をふまえて、河岸、城址、城下町の調査と文書資料の所在確認を行なった。佐原は利根川流域の商業都市として重要であるが、佐原については、在郷町の形成過程、酒・醤油などの醸造業の発達と舟運流通、祭礼の双分制的構造、都市空間構造などの発表を踏まえて、河岸、神社をはじめとする都市構造の調査と文書の所在確認を行なった。また、九月の佐原の祭礼の現地

調査を実施した。また、本研究では第二期に研究成果をもとにした展示企画を構想しているが、これに関連して、企画展示「収集家一〇〇年の軌跡」の見学と展示評価を試みた。とくに、地方都市における知識層の形成と地方都市文化について議論が集中した。

三年間にわたる本基幹研究の研究成果を総括すれば以下の通りである。

#### ①都市地域特性の概念

本研究は近世以降における日本の都市の地域特性を流通・消費・文化に焦点をあてながら、歴史学、民俗学、社会学、地理学などの研究者の参加を得て明らかにするのが目的であるが、研究の開始にあたって、これまでの国立歴史民俗博物館の都市研究における位置、および本研究の中心概念のひとつである「都市地域特性」の概念について検討した。国立歴史民俗博物館のこれまでの都市研究は、都市の生活空間構造に焦点があったが、本研究は流通・消費・文化を中心に都市住民の生活史に焦点を置くことをまず確認し、その上で城下町、市場町、門前町、近代産業都市などの都市類型を超えた都市の地域特性を明らかにすることを本研究の目標として確認した。都市地域特性とは都市生活の基本となる都市性、つまり都市の生活様式の地域的な差異である。都市はそれぞれの地域において周辺地域の農村などと緊密な関係を持ち、一定の都市圏の中核として地域特性を保持している。周辺地域を含めた日本各地の都市の地方的性格が都市地域特性である。

#### ②日本の都市の地域特性

この基幹研究には、これまで日本の各地域と都市の実証的研究をすすめてきた都市史研究者が参加している。本研究では共同研究参加者の個々の事例報告によって、これまでの各分野の都市地域特性に関する研究を検討した。報告された都市は仙台、川越、成田、銚子、関宿、佐原、江戸、松本、大阪、倉敷、名古屋、八尾、山口、那覇など数多くの都市に及んだ。これらの報告から都市地域特性を明らかにする上で問題とな



る主要な都市的要素として、流通商品、河岸舟運、都市社会構造、芸能興行、祭礼、民間信仰、方言などを抽出した。とくに近世以降の商品や情報の流通構造について多くの報告が行なわれ、利根川と江戸を中心とする流通構造については、江戸の河岸問屋をめぐる争論や銚子、関宿、佐原などの都市構造を含めて基本的構造が明らかになった。また、都市の地域特性を規定する主要な要因についても検討を加え、近世諸藩による上からの都市計画をはじめとする都市形成の諸形態、河川、海岸、平野との関連での都市の地理的位置、大規模都市との距離や交通通信関係などの都市の社会的地位、産業構造の変化、観光化、地域活性化運動、周辺地域との関係などの重要性が明らかになった。

### ③ フィールドワーク対象都市の選定

本研究のいまひとつの目標は第二期のフィールドワークを中心とする研究に備えて、対象となる都市を選定し、基礎的な調査を進めることであった。当初は三都以外の都市研究をめざして、名古屋を中心とする中部地方の都市をフィールドワークの対象とする予定であったが、名古屋をめぐる都市研究、とくに近世都市研究の状況が必ずしも十分に整っていないと判断し、フィールドを下総地域の都市に変更した。本研究の第二年度からは、下総地域の諸都市、とくに銚子、佐原、関宿、成田、佐倉など利根川流域から江戸にかけての都市の予備的調査を集中的に実施し、文書資料の所在確認、都市祭礼や都市空間構造をはじめとする都市地域特性の予備的検討を行なった。これらの作業によって、第二期に実施する利根川流域から江戸（東京）に至る諸都市の本格的なフィールドワークの基礎が整った。

### (5) 第二期研究への展望

第一期研究はいくつかの点において問題があった。そのひとつはA B両班の連携の問題である。本研究においては、これまで二度（第一年度

の発足時点と第二年度の間点）にわたって合同研究会を開催し、全体の研究目標と中間点での各班の議論について確認したが、流通・消費から都市性を明らかにしようとするA班と、都市地域特性を明らかにしようとするB班とは、対象とする時代の違いもあって議論は必ずしも十分に噛み合わなかった。A B両班のいっそうの連携は第二期の課題である。

### 3 研究成果報告

これまでにのべた研究目的と研究組織、および研究経過で、この基幹研究「日本における都市生活史の研究」が進められたのち、共同研究員個々の論文執筆に入り、ここに研究成果報告を『国立歴史民俗博物館研究報告』の一冊として刊行する運びになった。この報告書は、おもに二部構成で成り立っている。第一部は全国各地の都市の地域特性に関する個別論文の集成である。それぞれの共同研究員がこれまでに蓄積されてきた調査研究の成果がここに発表されており、青森県から沖縄県に至る各地の都市の地域特性が、近世史、民俗学、社会学、考古学などさまざまな視角から明らかにされている。第二部は、一九九九年三月に開催した総括シンポジウム「都市の地域特性—下総における都市と地域特性—」における報告をもとにした論文である。この基幹研究では、第二期に下総地域の地域特性についての本格的な調査研究を計画しており、このシンポジウムはそのための問題点の抽出をめざしたものであった。この報告が、今後の日本の都市史、都市民俗学、都市社会学などの研究に何がしかの貢献を為しうるとすれば幸である。

基幹研究の三年間、この基幹研究に参加していただいた共同研究員の方々、この報告書に論文を執筆いただいた方々、とくにB班「都市の地域特性とその展開過程」の研究代表者をつとめていただいた吉田伸之氏に深く感謝申しあげる。最後に、この報告書の刊行が大幅に遅延したために早くから原稿を執筆いただいた方々には、多大なご迷惑をおかけし

たことを、ここに深くお詫び申しあげます。とくに、共同研究員の宇佐美英機氏は早くから原稿をご提出いただいたにもかかわらず、刊行の大幅な遅れから原稿を取り下げられたことをここに報告するとともに、宇佐美氏に深くお詫び申しあげます。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)